職場リーダー 課題を語る

入所者の重度化 ケア工夫

高齢者介護の仕事に取り組む職員たちの思い、その奮闘ぶりを伝えてきた「支えたい」も最終回。いま、現場が抱える課題は何か。これからの介護に必要なことは。施設、訪問、認知症介護などの職場を引っ張るリーダーたちに語ってもらった。（梅崎正直、写真も）

支えたい 介護の現場から

施設

島根県江津市の特別養護老人ホーム「白寿園」で介護係長を務める岩本智恵さん(40)は、この道20年。「体力的にも、精神的にも負担が大きい仕事。それでも不思議と、他業種に転職しようと思ったことはありません」と話す。園で最期を迎える入所者を、家族とともに見守るとき、仕事の重要さを改めて感じるという。

現在、職場が直面している問題は、入所者の重度化だ。口から食べるのが難しくなり、胃にチューブで栄養を送る「胃ろう」など、医療的ケアが必要な高齢者が増えている。気管にたんや食べ物が詰まり、急いで吸引しなければ命にかかわる場面もあるが、介護施設の職員は法律上、吸引を行うことを許されていない。それが看護師のいない夜間に起きることも考えられる。

障害が重くなると、病院へ移ってもらうケースもある。しかし、岩本さんは、「老人ホームは、お年寄りが自分らしく暮らせる生活の場。できれば最後まで園でお世話をしたい」と話す。

国はようやく重い腰を上げ、特別養護老人ホームの介護職員に一部の医療行為を認めることを25日に決めた。岩本さんの願いにも一歩近づきそうだ。

訪問

東京都内の訪問ヘルパー、藤原るかさん(54)は、週に20回以上、お年寄りの自宅を訪問する。いま問題を感じているのは、1日7、8回の訪問をこなす過密勤務のなかで、1回あたり30分という短時間ケアが基本となっている現状だ。「寒い朝、着替えができるよう部屋を暖める時間もない」

忙しく移動するうちに、自転車のブレーキをかけ過ぎ、手首がけんしょう炎に。孤独死を発見したことは、過去に5回。そういうときは、しばらく立ち直れない。

それでも、介護の仕事は楽しいという。お年寄りと正面から向き合いながら、生活の不自由を一緒に乗り越えていくのが介護の仕事だと、藤原さんは考える。「これからのヘルパーには、生活の不自由を見通してプランを作るケアマネジャー並みの能力が必要です」

デイサービス

昨年11月、川崎市に誕生した認知症小規模デイサービス「桃の木亭かたひら」。利用者1人に職員3人という体制からスタートしたが、今は6人のお年寄りが通う。管理者の川内潤さん(29)は「お年寄りの活躍の場を作りたい。自信を回復し、喜んでくれることが、僕たちのやりがい」と熱く語る。

ずっと家にいたときは乱暴だったお年寄りが、デイサービスに通うようになってからは家でも落ち着き、家族にも驚かれた。

職員の側が教えられることも多い。「お年寄りの人生に耳を傾けるのは、本に載っていない歴史を知ること」と川内さん。

認知症に特化した小規模デイサービスの取り組みは各地で始まっているが、横のつながりはない。「業界内外との情報交換を通じ、経験を共有できる場が必要」と問題点を指摘する。

グループホーム

一緒に買い物に行き、食事を作る、といったグループホームのイメージも変わりつつある。岩手県一関市の認知症高齢者グループホーム「つくしの里」の介護主任、斎藤妙さん(41)は「入所者の身体の障害も、認知症も重度化してきた。状態に合わせた個別のケアが増えている」と明かす。重度化は、ここでも課題だ。

防災には絶えず気を配る。2カ月に1回の避難訓練に加え、年1回は近所の人と消防団を交えた訓練も実施してきたが、札幌市のグループホーム火災を受け、改めて職員全員で避難方法を確認した。来年度にはスプリンクラーも設置する。

腰を痛めた経験は10回以上。それでも介護の仕事を18年続けてきた。「大変な思いをしてきたご家族のお役に立っていると思うから、続けられている。そして、何よりお年寄りの笑顔に支えられます」と結んだ。

●介護施設が抱える大きな課題は、入所者の重度化への対応だ（中央が岩本さん。島根県江津市の「白寿園」で）
●「仕事を続けるには、家族などの協力も必要」と話す斎藤さん（岩手県一関市の「つくしの里」で）

4月から新設のテーマ相談

「肛門」と「目」 質問受け付け

読売新聞の医療情報サイト「ヨミドクター」は4月から、有料登録した読者を対象に、「医療相談室」内に「テーマ相談」コーナーを新設します。毎月、2テーマについて質問を募り、翌月、サイト上で集中的に回答を掲載します。

miDr.
クター
//yomidr.jp